

世界地図から消えた国

ドイツ民主共和国 1

はじめに

昨 1992 年 7 月から 8 月にかけて、私は統一なったドイツの東部地域、ザクセン州のライプツィヒ (Leipzig) に、一月ほど滞在する機会をもった。ライプツィヒ大学に付属するヘルダー研究所の語学講座に参加したのだ。

90 年 10 月、悲願の統一を達成して以来、早二年が経過していた。しかし、ベルリンのシェーネフェルト空港に降り立った 7 月末日のその日、亡命先のモスクワからかつての東独第一書記、エーリヒ・ホーネカーが送還され連邦検察庁下のベルリン・モアビット拘留所に収監された。彼は国境警備隊員に越境者を無条件に発砲するよう命令したことで、連邦共和国 (西ドイツ) の司法当局により告発されたのだ。このことに限らず、私が滞在しました訪ねた至る所に、かつての東ドイツ即ちドイツ民主共和国の残影が見られた。

私と東独との縁 (やや大袈裟だが) は、1985 年に遡る。その年の夏、ポーランド訪問後に西ベルリン経由で東ベルリンを訪れた。またかねてから訪問したかった南部のドレスデンとライプツィヒ両市を続けて訪問した。これは元来ドイツびいきの私が、西ドイツだけでなく東ドイツにもと出かけたものだが、初めての東訪問は観光地を訪れたこともあり、必ずしも悪い印象を得るものではなかった。ただし、大戦時に大規模爆撃を受けたドレスデンは、歴史的市街地の復興において未だ途上であり、中心街に多くの空き地を残していた。またわずか数日の東ドイツ滞在後に西に出た時は、その都市の明るさに幻惑されるほど東側の慎ましさを感じたものだ。

そして 1987 年春の東ドイツ再訪となる。この時は西側観光客がめったに入らない北



図 1 ドイツ民主共和国の県別地図 中央右にベルリン。下方にライプツィヒ県。統一後は、ザクセン州に統合。

部のメクレンブルク・フォアポンメルンをドライブした。ロマン主義の画家カスパー・ダヴィッド・フォン・フリードリヒの生地、グライフスヴァルトを訪ねたのだ。私がそこで見たものは、ある種のショックを伴うものだった。それは戦後四十年近くたつのに、依然として復興がなされていない街の姿だった。街路の大半はでこぼこで、中心街の店の看板の多くが半ば崩れたまま補修を必要としていた。ここが 15 世紀以来の大学をもつ伝統ある都市とはとても思えないほど、廃れているという印象をもった。

二度の旅を通して私が感じた東ドイツの印象は、イデオロギーの優劣は置くとしても、とにかくこの国は西ドイツより貧しいということ。この国をして「東欧の優等生」という評価があるが、少なくとも民生部門においては、その水準はかなり低いのではないかと

ということだった。また西側観光客に国営のインター・ホテルの宿泊代として要求するDM(ドイッチェマルク)は、この国のタテマエとは異なる西ドイツ通貨への拝金主義を示していると思った。

わが国ではこの欧州の小国について、その政治体制について語られることは少なかったが、例えば1979年に東ドイツが建国三十周年を迎えた時、野党第一党を名乗る政党の機関誌は、第一書記ホーネカーの写真入りで祝賀する特集を組んでいた。この国の社会主義をバラ色に見る傾向も我が国の一部には存在していたのである。

その国が十年後の夏、ハンガリーなど第三国経由の西ドイツへの大量脱出者を見ることになった。秋には改革を求める市民の大規模な抗議デモに出会うことになった。そして11月9日、ついにベルリンの壁が開き、その後1年を経ずして東ドイツは西ドイツに吸収合併されることになる。



1990年、統一を祝うブランデンブルク門前のベルリン市民。その間に明らかにされたのは、単にこの国の民衆生活の貧しさばかりでなく、国家保安省(STAGE)や独裁的権力を振るった社会主義統一党による様々な形の圧力、市民的自由の欠如、回復できぬほどに進んだ環境破壊といった否定的な側面だった。東ドイツの掲げていた理念は虚構で、現実とは異なることが暴露されてしまった感がある。統一された現在、各地で競争力の無い人民所有企業(VEB)が解体され、大量の失業者が発生している。東

欧から経済難民が押し寄せる中で、右翼過激主義者による外国人への襲撃が頻発している。

なぜこうなってしまったのか？なぜこうも簡単に「体制」が瓦解してしまったのか？なぜ東ドイツには自己改革の道が用意されなかったのか？なぜ反ファシスト運動の防壁を自認していた東ドイツで、これ程までに右翼過激主義が跋扈するのか？疑問は尽きない。以上のような関心と問題意識をもって東ドイツ社会を振り返り、あらためて統一後の現状をライブツィヒ滞在中の経験も交えながら報告したい。

東ドイツの歩み

ドイツの戦後は日本と同様、戦災の廃墟から復興するという形で始まった。この時ソ連占領地区とされたのが、後の東ドイツ即ちドイツ民主共和国(DDR)だった。モスクワから帰って来たドイツ共産党のヴァルター・ウルブリヒトは、ソ連当局を後ろ盾にして東ドイツの社会主義化を進めることになる。ナチ党関係者の追放、農地改革の徹底と地主の追放、そして政治的には支持の少ない共産党に代わる指導政党としての社会主義統一党(SED)の発足等、着々とソ連型の集権体制を整備していった。ここで重要なのは、それが決して下からの革命の形をとることなく、占領当局の強制によるものだったことだ。SEDは共産党と社会民主党が合同して作られたもので、社会民主党のオットー・グローテヴォールなど一部にはその推進派もいたが、ほとんど強制されたものであり、しかもこのSEDでさえ1946年秋の自由選挙では十分な支持を得られなかった。

米英仏三国の西側占領地区(後の西ドイツ)ではマーシャル・プランによる経済復興が始まり資本主義経済が再興される一方、東

側ではソ連当局による工場接収と機械設備の解体・本国送還が徹底して行われ※1、東ドイツは経済復興に大きなハンディを背負うことになった。こうして段々と東西の溝が深まり、49年には東西両ドイツの誕生へと向かう。

50年代の東ドイツは、ソ連占領を脱したものの冷戦激化の中、居続けるソ連軍の無言の圧力を背景に、中小企業までを含む企業の人民所有化（国営化）、協同組合の形をとる農業の集団化等、いっそうの社会主義化を推進した。これらも強制されたもので、それを嫌った者は西ドイツへと去って行くことになる。そして技術や労働力の流出がさらに経済低下を招き、53年6月の全国的な労働者のデモとストを惹起することになった。この蜂起をソ連軍が潰す。労働者に妥協的なSED幹部は追放され、ウルブリヒト主導の国家体制はますます強権的なものになって行く。



ベルリンの壁(1965年)

50年代末から始まった農業の完全集団化は、60年代に入ると毎月1万人を越す西ドイツへの流出者を生み出した。すでに閉鎖されていた東西ドイツの国境に代わり、唯一の脱出口が東西ベルリンの境界だった。東ドイツ政府からすれば、絶え間ない労働力の流出を防がなければならない。61年8月、そこに出現したのが、あの「ベルリンの壁」だった。壁の構築は国際的な非難を浴びた。しか

し、東ドイツはこれによりようやく労働力の流出と言う問題を解決し、本格的な国家建設の安定期に入る。68年に発布された新憲法では、その前文に東ドイツを「ドイツ民族の社会主義国」とうたい、社会主義化が完成されたとした。

70年代は西から吹いて来た風すなわち西ドイツの「東方外交」により、平和共存が確認され、72年には国連への両ドイツ同時加盟が実現した。この時、ウルブリヒトに代わって政権を担当したのが、モスクワ以来の彼の直弟子エーリッヒ＝ホーネカーだった。ホーネカーはウルブリヒトと同じく強権的な東ドイツ体制の護持者だったが、彼の時代、オリンピックでの東ドイツ選手の活躍は大いに国家の威信を高め、また経済の安定はいっしか人にこの国を「東欧の優等生」と呼ぶようにさせていた。

80年代に入ってもこの基調は変わらず、加えてこのドイツ東部における国民の郷土愛等を利用して、ナショナルな国家造りに励んだ。東ベルリンの目抜き通りにプロイセン王フリードリヒ大王の馬上の像を復活させてみたり、ザクセンの古都ドレスデンのツヴィンガー宮殿やゼンパー・オペラ劇場を再建した。これらは西側からの訪問者にもアピールした。プロイセン時代の画家だった前述のフリードリヒについても、東ドイツ政府は記念の銀貨を発行したりしている。

一方で市民社会化が進み、長期休暇（ウーアラウプ）が当たり前になり、バルト海（オスト・ゼー）沿いの休養地には、数多くの休暇施設が建てられた。青少年の意識の中には、国家への忠誠よりも「生活享受の目標」が幅をきかすようになる※2。ソ連東欧圏への旅行も盛んになった※3。80年代後半からは一般人でも西ドイツ訪問が許されることが多くなった。こうして1989年秋の平和革命へ

の道が用意されて行ったのである。

※1 「釘の一本に至るまで」という徹底したソ連による解体と本国への移送が行われた。しかし、戦時中、国土の主要部分を侵略され一千万を超える犠牲を出したソ連にとって、これは賠償という意味でやむを得ない面があった。東ドイツ国鉄(DR)の幹線に単線が多いのも、この時ソ連がもう一つの線路をはがして行ったからという。

※2 ライプツヒの「青少年中央調査研究所」のハリー＝ミュラーの行った人民議会最高幹部会への報告(1980年)による。なお、この報告は極秘とされ、政府は相変わらず「社会主義に奉仕する健全な青少年」像が不変であると宣伝していた。

※3 1988年の夏、ソ連極東のハバロフスクを訪れた際、ホテルの前庭で騒ぐ元気な団体がいた。果たして、東ドイツからの青年たちだった。その前85年には、ポーランドでやはり彼らと出会っていた。私の限られた印象からしても、東ドイツの観光客は幅をきかせていたと思う。



冬季オリンピックの華だったカタリナ＝ヴィット(1988年)

東ドイツの政治体制

ドイツ民主共和国での政治の在り方は、旧ソ連と東欧諸国における「人民民主主義」の体制と基本的には変わらない。その中であえて特徴を挙げるとすれば、戦前のファシズムに対するドイツ社会主義の分裂を教訓として、社会民主党と共産党の合同が図られたこと。この社会主義統一党(SED)が指導政党となったものの、人民議会には諸政党が存在し形式的には議会制民主主義を採用したこと、などが挙げられる。

敗戦直後、ソ連占領地域において、戦前の議会政党の多くが早くも復活した。それらはソ連の指導の下に反ファシズムの「民主ブロック」を結成した。共産党・社会民主党・キリスト教民主同盟(CDU)・自由民主党(LDPD)である。46年4月には、これらブロック政党の中、共産党と社会民主党が合同してSEDが造られた。ベルリンでの社会民主党の党員投票では大部分が統一に反対の意思表示をしたが、合同は強行され、さらに48年頃からSEDにおける社会民主党系の党員は排除されて行く。SEDの実態は統一とは名ばかりで、実質上の独裁政党として機能していくことになる。

東ドイツの最高意思決定機関「人民議会」でも、500人の代議員の過半数が、SEDとその支配下の自由ドイツ運輸労組会議・自由ドイツ青年団(FDJ)・ドイツ婦人民主連盟(DFD)・民主共和国文化連盟に予め割り当てられた。国民各層を代表する他の政党にはどんなに国民の支持が集まろうと、政治権力を掌中にできぬ仕組みになっていた。またその他の政党と言っても、実質はSEDの衛星政党であり、「人民議会」のこれらすべてが政治運動体としての「国民戦線」を形作っていた。

図2 人民議会の構成

政党及び国民代表の機関	代議員数	構成比
社会主義統一党	127	25.4%
民主農民党(DBD)	52	10.4%

キリスト教民主同盟	52	10.4%
自由民主党	52	10.4%
国民民主党	52	10.4%
自由ドイツ運輸労組会議	68	13.6%
自由ドイツ青年団	35	7.0%
ドイツ婦人連盟	40	8.0%
民主共和国文化連盟	22	4.4%



人民議会が入っていたベルリンの共和国宮殿

SEDは党員数220万を擁し（全人口の何と8人に1人！）、生産現場を中心に国民各層の代表を集めていた。工場でも企業でも、学校でも官庁でも、その管理的立場にあるものは党員であることを求められ、SEDの党員で無ければ国家の中枢に入ることも、出世することもできなかった。選択の余地はなかったのである。230万人を擁するFDJは実質上、SEDの青年部の役割を果たした。党第一書記に上り詰めたホーネカーも、また最後の第一書記になったエゴン＝クレンツも、FDJ代表のキャリアを経験している。そして140万人を擁するDFDは、その婦人部の役割を果たしたのである。

人民議会が選出する形で政府を代表する機関「国民評議会」が存在した。この議長もまた、SEDの書記長になる仕組みだった。ホーネカーは国家評議会議長として、人民議会を構成する諸政党の代表者たちとこの会議を主宰していた。「国民評議会」とは別に、行政機関としての「大臣評議会」も存在した。

これもまた、SEDの政治局員ヴィリー＝シュトーフ（84年時点）を議長としていた。

機構上のSED支配に加えて、「人民議会」を選ぶ国民の投票行動にも、SED支配を揺るがぬようにする仕掛けが存在した。東ドイツの発足以来、議会の選挙は9割以上の高投票率を誇っていたが、投票所に来る選挙民がするのは、前述の「国民戦線」を担う諸政党の代議員名が書かれた「共同リスト」をそのまま選挙管理委員の前で投じることであり、これに否という場合だけそれを記入する部屋に行くことだった。そこへ行こうものなら治安当局によりブラックリストに載せられるという「暗黙の抑止」がはたらいたのである。

SEDの礎を築いたのは、モスクワから帰って来たウルブリヒトだった。彼とその弟子ホーネカーは、1930～40年代のソ連における「スターリン禍」をくぐり抜け、だからこそ筋金入りのスターリン主義者として、この「社会主義のドイツ」を建設しようとした。それを受け容れられぬ者たちが党を除名され、また国境の西へと去って行った。ソ連・東欧に見られる「民主集中制」※4により偽装されたこの国家は、後述する人民の意思を抑圧して来た保安機構（STASI）をバックに、SED指導部（具体的には政治局員）というお上からの命令と強制の一元的な国家体制を築き上げた。80年代後半にソ連からのペレストロイカの風を受けるまでは、その支配は盤石の様に見えた。

しかし独裁的な権力は、それをチェックするはたらきを欠いていた。いつの間にか権力は腐朽し、一部の党官僚が特権を享受するような不正に満ちた社会が生まれていた。89年秋、真の意味での「民主化」にライブツィヒの市民が立ち上がった時、そのプラカードに「我々こそ人民だ（Wir sind das Volk）！」と書いたのは、この権力を再び人民に取り戻

そうとする意志が示されていたのである。

※4「民主集中制」とは、人民民主主義を標榜する国家の組織原則で…、一方では官僚的集権主義と他方では無規範的な民主主義とから自らを区別し、目標に向かつての政治局の指導性と一般人民の創意ある自発的な活動を両立させようとするもの。相互のコミュニケーションを保障し、中央からの一方的支配と下部におけるアナーキーな活動を排除し、克服しようというもの。

現実には、指導政党による一党独裁として機能した。

東ドイツの経済体制

SED独裁とまで呼ばれた極めて集権的な政治体制の下で、経済もまた中央からの命令と統制による体制をとった。敗戦直後のソ連占領地域では、日本の戦後改革に当たる土地改革と企業の没収が行われた。土地改革によりそれまでユンカー※5の下にあった小作農民は土地所有を認められ、自営農が一般的になった。しかし、公安当局主導のやり方は日本のそれと違って、地主に一切の権利を認めぬばかりか、殺されたりシベリア送りになったりする苛烈なものだった。



ツァイス社(旧東ドイツ)制作の高性能レンズ

一方、大企業は公的所有とされ、それに従えなかった戦前の経営者は西側へ移って行った。例えば、テューリングゲン地方の都市イエナに本拠のあるカール＝ツァイス社は光学機器メーカーとして世界的に有名だが、旧東ドイツのこの人民所有企業とは別に、西ド

イツにも同じカール＝ツァイス社ができ、共に世界的な企業に成長した。

ドイツ民主共和国成立後の1952年、SED指導部はそれまでの自営農への土地解放を一気に転換して、生産協同組合方式の企業化すなわち農業の集団化へと踏み出した。これは土地をやっと手に入れた自営農にとっては、希望を打ち砕くものと映った。集団化を嫌った農民は西に去り、それに伴う経済悪化も手伝って、53年には61年の壁構築前では最高の33万人を越える人々が西ドイツに移った。集団化の当否は置くとして、これらの強制がソ連にとって代わった東ドイツ公安当局の圧力の下に実施されたことは、民主共和国の内実を示すものだった。

占領時代にソ連への賠償目的で直接その傘下に入った企業(SAG)が返還されることになった1955年、工業生産の8割が「人民所有」となった。しかし、手工業者は集団化に抵抗し、その生産協同組合に組織されたのは3割に満たなかった。大企業の没収から始まった生産手段の公有化は、その後も段階的に拡大し、70年頃までに従業員10人以上の中小企業の人民所有が実施され、それ以下の私企業も公安当局の様々な圧力の下、党・政府の統制下に置かれることになった。

特に中小企業の人民所有は、現場の実情を知らぬまま一律に派遣された党官僚の統制により、品質管理と技術革新がなおざりにされ、中央からの材料供給・ノルマの達成が至上課題となり、硬直した運営方法が採用された。おぞましいことには、民生部門を中心に備え付けられた機械の更新や維持と言ったものがなおざりにされ、多くの業種で戦前の機械・設備が利用され続けた。製品の質は落ちるばかりだった。

こうした硬直性は戦略的な投資が行われることもあった大企業においても多々言え

ることで、戦前からの重化学工業地域では、深刻な環境問題を発生させることになった。ハレ県(現在のザクセン=アンハルト州の一部)の工業都市ビターフェルトは今や東ドイツにおける環境破壊の典型例とされているが、多くの工場では機械設備が老朽化しており、また西側では設置義務があった脱硫装置さえ備えていず、これが周辺の大気を毒気に満ちたものにしていった。※6

周知のとおり、ドイツ人は朝が早くしかも勤勉な国民だが、東ドイツでは労働時間が長い割には、その生産性は西に比べてかなり低かったという。その理由は、ソ連・東欧圏ではどこでも見られた流通機構の不完全を直接の理由として、公立の悪い部品や材料の調達が製品の完成を遅らせ、労働者に無駄な待ち時間を多く与えたことだという。その背景には道路や鉄道の未整備や※7、電話通信網の旧態然とした有様など、インフラストラクチャーの劣悪さがあった。

労働力と人材の流出というもう一つの問題を、「壁の建設」という形で解決した60年代、東ドイツの国民総生産は西の2/3に近い規模となった。これらが「世界十大工業国の一つ」とか「東欧の優等生」といった神話を作り出した。しかし、実際の国民生活では以前からあった西との格差は広がるばかりで、東ドイツ市民が多く視聴していたという西ドイツのテレビを通じて、西側製品への羨望は常に高かった。壁が開いて東ドイツ市民が西側の中古車を買えるようになった時、10年待っても入手できなかったあのトラバントに見向きもしなくなったことで、それは十分理解される。

表向き、西ドイツを「帝国主義の前衛」として否定した東ドイツは、現実には西の通貨ドイツマルク(DM)を渴望し、西ドイツをソ連に次ぐ第二の貿易相手国として、ビジネスの



往年の東ドイツの国民車 トラバント

拡大に努めた。東西ドイツ間での貿易が大幅な西の出超であったのは言うまでもない。80年代に入り、伝統の復興といった文化政策の変更によって、東ベルリンやドレスデンなどの古都で化粧直しが始まると、西側観光客誘致のため同じ西側資本による豪華ホテルの建設が始まった。東ドイツへの入国客は、ビザの取得と滞在日数分のこれらホテルへの予約を義務付けられた。しかもその支払いは、すべてDMによったのである。※8

生産手段の公有により、ソ連と同様「5か年計画」による社会主義経済を目指した東ドイツ。その謳い文句は、「搾取も飢えも失業もない社会」だった。それに間違いはないが、国民全体の生活水準は絶えず比較の対象となった西ドイツとは、かけ離れたままに止まった。絶えざる労働力の流出、それを防ぐための国防や治安への過大な支出、情報化社会の立ち遅れなど、先に述べた生産組織の不完全さに加え、幾つも理由は挙げられる。こうしたタテマエと本音の乖離は、一旦「壁」が崩れるとそれを埋め合わせようとする奔流となって行ったのだ。

※5 ユンカーとは、この地にあった封建国家「プロイセン」以来の土地貴族のこと。農民は彼らに隷従する農奴的な性格を残していた。

※6 外貨節約のため、東ドイツではこの地方で採れる褐炭を一次エネルギーとして利用していた。汚染は、その硫黄分が原因だった。92年夏、この地を經由してベルリン方面を往復したが、一部は脱硫装置の設置により、他は工

場の操業停止や閉鎖により、以前の異臭は消えていた。

※7 アウトバーンは、西側とベルリンを結ぶ区間(西側の旅客が通る)以外は殆ど修繕されぬままだった。鉄道は単線区間が多だけでなく路盤の整備が行き届かず、列車が戦前と同じスピードで走らざるを得ない区間が多かった。



在りし日のメロポール・ホテル 東ベルリン

※8 85年夏、東ドイツを旅行した際、東ベルリンのメロポール・ホテルとライプツィヒのホテル・メルクーアに宿泊した。共に外国人向けのインターホテルであり、宿泊費は一泊160DM(1万3千円相当)ほどもかかった。DMで支払いを要求することに驚くと、受付の女性は非常に心苦しい表情を浮かべていたが、これこそ欺瞞的な体制の一端を示していたと言ってよい。

なおメルクーアは、日本の鹿島建設が企画したもので、当時は日本レストランまで備えていた。同社はその後、ドレスデンのエルベ川沿いの一等地にも、ベルヴューという名的高级ホテルを建設した。

その1了